

2024 年度
愛知の外国語教育
(第53集)

目次

I はじめに	2
II 研究の内容	3
教育課程編成活動について	3
実践事例	4
III 第74次教研のまとめ	6
(1) 主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方について	6
(2) コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方について	6
(3) 思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方について	6
(4) 助言から	6
IV おわりに	7

愛知県教員組合 教育課程研究委員会外国語部会
2024 年度 教育課程研究委員

ブロック推せん

◎部長 ○副部長

名古屋			尾 張			三 河		
名 前	単 組	学校名	名 前	単 組	学校名	名 前	単 組	学校名
○鈴木ひと恵	名古屋	若水中	◎松浦 昂平	春日井	石尾台中	楠崎 寛人	豊田	野見小
金泉 賢司	名古屋	植田中	○鈴木 理雄	尾北	(岩倉)南郷中	鈴木 啓仁	豊川	一宮東部小

第71次～第73次教育研究集会全国集会リポート提出者

71次			72 次			73 次		
名 前	単組	学校名	名 前	単組	学校名	名 前	単組	学校名
青木龍一	一宮	萩原中	白澤義顕	蒲郡	三谷中	足立友里	稲沢	平和中

第74次教育研究全国集会 リポート提出者 天野圭祐（岡崎・上地小）

I はじめに

教育課程研究委員会外国語部会では、以下にあげる基本的な考えのもと、第74次教育研究活動の重点である「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切に、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動」をふまえて研究をすすめている。

また、多くの言語活動を通して「どの子にも必要な学力（基礎・基本）」を身につけ、そこで学んだことを日常生活に活用していけるような「その子にとって必要な学力（生きてはたらく力）」を育む「ゆたかな学び」を意識して、日々の授業実践や研究を行っている。

【教育活動にあたっての基本的な考え】

- ・各学校や地域の特性をいかし、子どもたちにとってわかりやすく楽しい学びを実現するためのでだてを工夫する。
- ・扱う言語材料は、「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力の総合的な育成をめざし、実際の目的、場面、状況を意識した言語活動を通して学べるようにする。
- ・小学校外国語の教科化により、いっそう小中学校の連携を推進する。また、他教科との連携を学校ぐるみで検討し、年間計画にもとづく指導を展開していく。

さて、第74次教育研究集会にむけて18本のレポートが提出された。子どもたちが楽しみながら英語を学び、積極的に自己表現できる力の育成をめざしたものが中心であった。本次県集会では、以下の三つの討論の柱ごとに、小グループによるレポート発表と討論が行われた。その後、各グループからの問題提起をもとに、全体で討論と意見共有が行われた。

- 1 主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方
- 2 コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方
- 3 思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方

来年度への課題については、以下の2点があげられる。

- ・ICT機器を活用した言語活動の充実
- ・学年間や小中学校の効果的な接続を意識した指導方法のあり方

本次県集会の成果と教育課程研究委員会外国語部会の研究内容をふまえ、今後も継続的な研究実践をすすめていきたい。

Ⅱ 研究の内容

教育課程編成活動について

外国語でコミュニケーションをはかる資質・能力を育成していくには、さまざまな言語活動を通して、言語の働きを理解し、これらの知識を活用して実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけていくことが大切である。また、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて情報や考えなどを理解したり、活用したりして、その場面にふさわしい表現力を養うことも大切である。

本分科会では、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動の充実をはかりながら、「ゆたかな学び」のある外国語科指導のあり方や、対話的な言語活動を取り入れた授業実践のてだてを追究してきた。そして、教育課程編成については、次の点を考慮した。

○ 教育課程編成にあたっての基本的な考え

ア： 「基礎・基本」について

- ・ 互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視するとともに、具体的な課題などを設定するなどして学習した語彙や表現などを実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化をはかる。
- ・ 4技能を「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと(やり取り)」、「話すこと(発表)」、「書くこと」の5つの領域に細分化して、目標を明確化する。

イ： 「生きてはたらく力」をのばすための重点

- ・ 主体的に外国語を用いてコミュニケーションをはかろうとする態度を養うために、外国語の背景にある文化に対する理解を深められるような指導を行う。
- ・ 一人ひとりの学びを大切にし、学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

また、外国語科の指導において「わかる授業・楽しい学校」を実現させていくためには、小学校や高等学校との接続を十分に考慮し、系統的に指導していく必要がある。

○ 「ゆたかな学び」のポイント

「ゆたかな学び」を育んでいくため、小中学校で扱う領域とポイントに留意しながら実践を行っている。

	領域とポイント
小学校	外国語活動[3・4年] ＜聞くこと＞＜話すこと[やり取り]＞＜話すこと[発表]＞ 児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。
	外国語科[5・6年] ＜聞くこと＞＜読むこと＞＜話すこと[やり取り]＞＜話すこと[発表]＞＜書くこと＞ 発達段階に応じて平易なものから難しいものへと段階的に指導すること。
中学校	＜聞くこと＞＜読むこと＞＜話すこと[やり取り]＞＜話すこと[発表]＞＜書くこと＞ 小中学校の接続を重視し、語彙、表現などを異なる場面の中で繰り返し活用することによって表現力を高めていけるように指導すること。

実践事例

主体的に追究する児童の育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」を生み出す小学校外国語科5年生の授業を通して～

教育活動にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

- ・各学校や地域の特性をいかし、子どもたちにとってわかりやすく楽しい学びを実現するための工夫をする。
- ・扱う言語材料は、「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力の総合的な育成をめざし、実際の目的、場面、状況を意識した言語活動を通して学べるようにする。
- ・小学校外国語の教科化により、いっそう小中学校の連携を推進する。また、他教科との連携を学校ぐるみで検討し、年間計画にもとづく指導を展開していく。

○「生きてはたらく力」

- ・主体的に外国語を用いてコミュニケーションをはかろうとする態度を養うために、外国語の背景にある文化に対する理解を深められるような指導を行う。
- ・一人ひとりの学びを大切にし、学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

1 ねらい

本研究でめざす「主体的に追究する児童」の姿を、以下の2つに定義づける。

- ① さまざまな言語活動を通して、自ら学習方法を選択したり、自分の学びを振り返ったりしながら自分の目標実現にむけてねばり強く努力する姿
- ② 多様な他者とかかわりを通して、互いの考えを意欲的に伝え合ったり自己の考えを広げたりする姿

タブレット端末を使った個別学習や、目的、場面、状況を設定した言語活動などのてだてを通して、上記のような児童の姿を引き出したいと考えた。

2 実践例における「ゆたかな学び」のポイント

単元の目標を設定したうえで、ICTを効果的に活用しながら、自ら学習方法を選択したり学びを振り返ったりする場を設定することで、児童は学習の成果や次への課題を実感しながら目標にむけてねばり強く学習にとりくめるようにする。

多様な他者とかかわる場を与えたり、目的や場面、状況を設定したうえで言語活動を設定したりすることで、児童が既習表現を活用して英語を伝えようとする。その中で、会話が成立する達成感を味わったり、活動を通して自己の考えを深めたりできるようにする。

3 実践について

（1）基礎・基本となる英語表現を習得する段階

英語での会話や発表を成立させるためには、基礎・基本となる単語や英語表現の学習が必要不可欠である。正しい発音やイントネーションで多くのインプットをすれば、アウトプットとなる今後の会話活動や発表練習にもスムーズにつながると考えた。まず1つめは、歌やチャンツを中心とした帯活動である。デジタル教科書内部にある英語の歌やチャンツを使うことはとても効果的であり、音やリズムを楽しみながら、使えるようになってほしい英語表現を自然とインプットできる。ALTにも助けをもらいながら、流れてきた歌詞を止め、全体でリピートするなど、歌やチャンツを通して基礎・基本となる単語や英語表現の定着をはかった。

次に、「帯活動としてのタブレットの効果的な活用」である。本学級では、クラス全員が参加しているWeb会議システムのチームがあり、各教科の資料などをデータでアップロードして児童が見たいときに見られるようになっている。本単元でめざす「個別最適な学び」を実現さ

せるために、単元開始前に基本表現となる英文を数十個録音し、アップロードをした。45分の授業の中で、最後の5分間を「イングリッシュ・トレーニングタイム」と題し、各自イヤホンをつけてひたすら英語を聞いたり教員が録音した音声に合わせて繰り返し発音したりするようにした。始めたばかりのころは、操作にとまどったり、英語を言うのが恥ずかしいような雰囲気クラス全体にあったりしたが、しだいに緊張感がほぐれ、「トレーニングタイムには英語をたくさん聞いて発音する」という意識が定着していった。

基礎・基本となる単語や英語表現を授業で学習した後には、それらをアウトプットする場が必要である。そこで、帯活動としてスモールトークを継続的に行っていくことにした。名付けて「CME（チェック・マイ・イングリッシュ）」である。この活動は、本研究でめざす「協働的な学び」の一つとして位置づけている。毎回の授業の最初の3分程度を使って、クラスを自由に歩き回り見つけた仲間と英語で会話をしていく。会話の内容は、その単元で学ぶ英文や既習表現になっており、事前にカードに書いてある。一つ質問したらペアを変えて、できるだけ多くの質問を友だちと会話練習ができるようにした。児童は自然と、英語で言える表現が増えていき、英語を使うことに対してやりがいを感じている様子であった。

（２） 課題達成にむけて努力する段階

パフォーマンステストにむけた、具体的な目的や場面、状況を、下記のように設定した。

今はグローバル時代。英語が使えなければ、どんな会社にも入社できない…。さて、あなたは就活生。もうすぐ、ある会社に入社したいと考えています。しかし！その会社に入社するためには、英語による面接試験があるのです！「自分ができること・好きなこと」を存分にアピールして、合格を勝ち取ろう！

文章による場面設定に加え、イラストを付けたオリジナルの会社を5社提示することで、児童の興味関心をひくように工夫した。また、その会社がどんな人材を希望しているのかを詳しく書いておくことで、自己アピールの内容を考えやすいようにした。児童自身で会社を選び、また内容を考える点において、学習が個別化できるようにした。

児童たちは、一斉にどの会社に入ろうか、自己アピールの内容はどうしようか、考え始めたり、同じチームの仲間と相談したりし始めた。内容を日本語で考えた次は、それらを英語に直していく活動に入る。ここではさまざまな学習の選択肢を整えて、児童が自分で調べたり、聞いたりできるようにした。内容を考えたあとは、いよいよ面接練習に入っていく。練習方法として、個人練習、ペア練習、ALTとの練習のほかに、自分の発表をビデオで撮影するという活動を組み入れた。児童たちにとって、自分が英語を話している様子を自分で撮影するのは初めての経験だったようで、最初はかなり緊張していた様子だったが、しだいに全員がとりくめるようになっていった。児童たちは、撮影したビデオを振り返る中で、声の大きさやジェスチャーなどの表現方法を磨いたり、間違った英語表現を正しく直したりすることができた。

（３） 課題の達成

パフォーマンステストとして、入社試験本番を行った。発表者以外は全員面接官という設定で、机を下げ、椅子だけを持って前に集まった。それぞれが練習の成果を発揮していくなか、面接官役の児童たちからは自然とうなずくような反応がみられたり、大きな歓声をもって、ここまでのがんばりを称えたりする様子がみられた。児童の中には、発表が終わった後、「おれは合格だった？」と聞かれ、教員は「もちろん、合格だよ」と伝え、とても嬉しそうな表情をしていた児童もいた。

４ 実践のまとめ

小学校外国語科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現にあたっては、さらなる検討の余地がある。それらを繰り返していく先に、児童が主体的に英語を学んでいく姿があるのだと思う。本研究で述べた以外にも、児童がより英語を学習したいと思える環境づくりを積み重ねながら、今後も「主体的に追究する児童の育成」をめざして研鑽を積んでいく。

Ⅲ 第74次教研のまとめ

(1) 主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方について

主体的に学習にとりくむとは「自ら発信しようとしているか」、「課題を見つけて学習にとりくんでいるか」と定めた。それらを育むためには、子どもたちが意欲をもって学習にとりくんでいく授業展開が必要であるという意見が出された。一人でじっくりと考える時間や他者と活動する時間を確保し、それぞれの活動の時間の振り返りを大切にすることが重要であるという意見が出された。

(2) コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方について

資質とは「コミュニケーションをはかろうとする姿勢」と定め、能力とは「語彙、文法などの力」と定めた。まずそれらを育むためには、英語でのコミュニケーションに必要な型や知識を子どもたちに示すことが第一歩であるという意見が出された。また、それらを駆使しながら生きた言語活動に移行していくためには、英語でコミュニケーションをする必然性は非常に重要である。そのため、教科書の内容を子どもたちの生活とリンクさせながら導入していくことが、英語教員の大切な仕事だという意見が出された。

(3) 思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方について

思考力・判断力・表現力を育むために、まず「目的・場面・状況の設定」について議論された。英語で活動を行う「必要性」と「相手意識」を感じさせることが大切であるという意見が出された。伝える相手に合わせて、表現の仕方を工夫することは生きていく中で必要な力である。その工夫する時間を確保するために、自分の考えた英語表現が分かりやすいかを周りと共に共有する時間や、自身で振り返り、よりよい表現方法を考えていく時間が重要であるという意見が出された。

(4) 助言から

○ 学習者用デジタル教科書を活用した言語活動

自律的な学びを促進するためのアプローチとして、学習者用デジタル教科書を活用する方法が紹介された。学習調整を行う時間において、学習者用デジタル教科書を活用して、ペアでアニメを見たり、画面を黒くして音声のみを聞いたりする事例が紹介された。また、児童生徒の「デジタル教科書の使用頻度」と「使用感」の関連のデータから、デジタル教科書の使用頻度が増えるほど「自分のペースで学習しやすい」「自分の学んだことを残しやすい」と答える子どもたちが多くなることが報告された。

○ 『令和の日本型学校教育』の構築をめざして

すべての子どもたちの可能性を引き出すために、「多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する」個別最適な学びと、「子どもたちの多様な個性を最大限に生かす」協働的な学びを実現してほしい。指導者においては、情報活用能力を向上させることにより、教え込む指導から「学び取る」指導へ、評価のための評価から「できる感」を感じる評価へ、同一・同量・同時の学びから学びの「多様化・最適化」へ、学習事項の定着から「学習方略」の定着へと指導方法をアップデートしていくことを期待したい。

Ⅳ おわりに

外国語の部会では、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの4技能の言語活動の充実をはかりながら、「ゆたかな学び」のある外国語科指導のあり方や、対話的な言語活動を取り入れた授業実践のてだてを追究してきた。本年度の県集会では、学年間や小中学校の効果的な接続を意識した指導方法のあり方についての討論が中心となった。また、ICT機器を活用した言語活動の実践についての有効性についても話し合われた。子どもの個別最適な学びと主体的・対話的な学びを実現するために、どのようにICT機器を活用していくことができるかについて、実践報告を聞いたり、活発な意見交換が行われたりした。また、情報交換では、英語で活動を行う「必要性」と「相手意識」を子どもに感じさせることが大切であるという意見に対して、さまざまな角度から議論がされた。限られた時間の中でも工夫を凝らして、教科書の内容を子どもたちの生活とリンクさせながら導入していくことが必要であり、子どもたちが意欲をもって学習にとりくんでいく授業展開をしていくことが重要であるという意見も出された。達成感や成就感を子どもに実感させることができる支援や教育をめざし、各自治体や各学校での実践報告による成果と課題について意見交換がされ、大きな収穫を得ることができた。

分科会や全体会、助言を通して、個別最適な学びと協働的な学びのどちらも実現していくために、特に自律的な学びを促進するためのアプローチとして、学習者用デジタル教科書を活用する方法が有効であるということが示唆された。また、一人でじっくりと考える時間や他者と活動する時間を確保するとともに、それぞれの活動の時間の振り返りを大切にすることが重要であるということもわかった。

来年度以降に残された課題は、以下の2点である。

- (1) ICT機器を活用した言語活動の充実
- (2) 学年間や小中学校の効果的な接続を意識した指導方法のあり方

単元の目標を設定したうえで、ICT機器を効果的に活用しながら、自ら学習方法を選択したり、学びを振り返ったりする場を設定することで、子どもたちは学習の成果や次への課題を実感しながら目標にむけてねばり強く学習にとりくめるようになっていくはずである。各自治体や学校の実情は異なるが、これからもゆたかな学びが実現していくよう、本県集会の成果と教育課程研究委員会外国語部会の研究内容をふまえ、今後も継続的な研究実践をすすめていきたい。